

<県研究主題>

児童一人ひとりの言語活動を充実させ、「伝え合う力」の育成を重視した学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 鈴木 勇樹 (中地区)

<研究主題>

児童一人ひとりの「伝え合う力」の育成を重視した学習指導と評価の工夫

1 提案内容

子どもたちのコミュニケーション能力の低下が見られ、「伝え合う力」の育成が必要であると実感する。特に、低学年において「伝え合う力」を付けさせるための学習の進め方、評価へのつなげ方を工夫していきたいと考えた。

(1) 実践内容について

○「伝え合う力」を付けるための工夫

- ① 教材の工夫…活発な話し合い活動の場
- ② 発表の工夫…想像を広げるような助言
- ③ 場の工夫…ペア学習→グループ学習→全体
- ④ ワークシートの工夫…一部書き込んだもの、友だちの意見を聞き新たに書き加える欄  
今日のふりかえりの欄など

○学習評価の工夫

- ・評価につながるようなワークシートを作成する。
- ・座席表の記録→個々の変容の見取り

(2) 成果 (○) と課題 (●)

○ワークシートの記述欄を工夫することが、場面ごとの読み取りに有効であった。児童は自分の思いを持ち、友だちと交流し、この繰り返しにより、「伝え合う」力がついた。

○ふきだしの中に「だって・・・」という言葉を入れておくことで、理由に目を向けることができていった。

○ペア学習→グループ学習→全体とステップを踏むことで、児童は自分の思いに自信を持つこと、思いを伝える喜びを感じることができた。

●本文の叙述に即して読み取る指導が徹底できなかった。

●伝え合うことにより児童の読みを深めるためには、どの場面で「伝え合い」を取り入れるか具体的に構想する必要がある。

●児童に身に付けさせたい力を明確化し、単元を見通した目標、評価規準、評価材料を具体的に設定し、見取った評価を次に生かしていくことが大切である。

2 協議内容

(1) 言語活動「お話列車」(提案者のオリジナル)とのつながりは?

A・単元の最初に見通しを待たせたかった。「伝え合う」活動という点のみでしかつなが

りが見出せなかった。「読むこと」からつながるような計画が必要であった。

(2) 何のための「伝え合い」か？付けたい力は何だったのか？

A・活動の目的意識、必然性は大切。伝え合うことの楽しさを感じさせつつ、評価につながるとうい。

(3) 2領域の評価は

A・「伝え合う」活動をさせるために、まず読み取っていくことに重点を置いた。単元としては「書くこと」もあるが目標が2つは多かった。それぞれ具体的な姿を設定し、見取っていかなければならない。

### 3 まとめ

[逆向き設計で考える]

- ・ゴール=付けたい力をしっかりと見据える
- ①学習指導要領の指導事項を選ぶ ②単元目標の設定 ③より具体的評価規準と根拠となる評価資料
- ・この付けたい力のためにどんな学習活動を何時間で展開するか考える。
- ・評価規準の見取りができていないか単元内で指導と評価の一体化を図る。
- \*これらのことは、年間計画にしっかりと表され当該学年の指導事項として指導し、次につなげていかなければならない。

[ペア学習について]

- ・低学年では思考を言語化できない児童もいる。ペア学習で安心して自信を持つことができる。その後全体にシェアしていくことも重要である。

提案2

提案者 後藤 尚平 (川崎地区)

<研究主題>

言語活動の充実を通して豊かな言葉の担い手を育てる

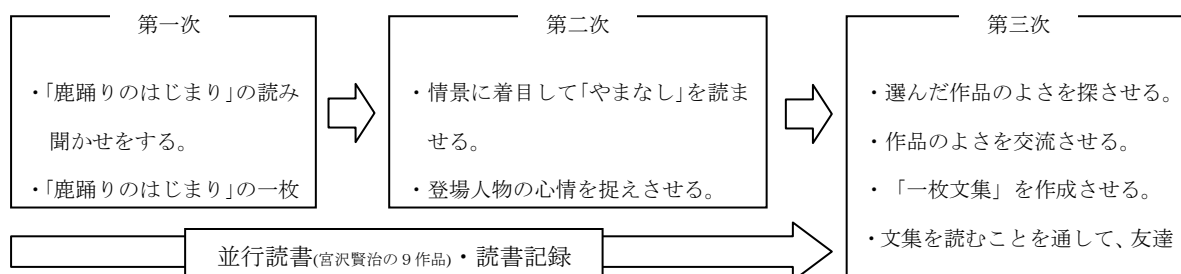
～ 読む力をよりよく付けるために、どのような言語活動を設定するか ～

#### 1 提案内容

情景が思い浮かぶ表現と登場人物の心情に着目して読み、作品の良さを捉える力を付けたい。そのために、宮沢賢治作品の中から、良さをまとめた「一枚文集」を作るという言語活動を設定した。

(1) 実践の内容について

##### ① 単元の過程



##### ② 指導の工夫

- ・学習課程の提示
- ・並行読書の本の精選
- ・「一枚文集」のコマ割り
- ・モデルの提示
- ・ワークシート
- ・交流の持ち方

## (2) 成果 (○) と課題 (●)

- 表現・情景に着目することを通して、作品世界を味わわせながら学習を進めることができた。
- 情景から登場人物の心情を読み取る姿や自分の体験と重ねながら読む姿が見られた。
- 一枚文集でコマ割りを配慮して3種類用意したが、表現の項目を落としてしまった。

## 2 協議内容

### (1) 並行読書について

- Q：並行読書に選んだ賢治の9作品は、どのように子どもたちが手に取るようにしたのか。
- A：9作品の本は図書ボランティアに依頼して約30冊、図書館にお願いして約70冊を集めて、教室に置いて読めるようにした。

### (2) 情景と登場人物の心情を捉えるために

- Q：作者自身にせまる学習も面白いのではないか。
- A：作品を味わうために一枚文集を作成することにした。作者に迫るやり方もあるが、今回は作品に迫ることを選択した。

## 3 まとめ

- ・見通しをもたせることで子どもたちは受け身にならずに、今の学習活動の意味が明確になる。単元の見通しをもたせたことで、与えられる学習ではなく意欲的・主体的な学習活動になった実践であった。
- ・第一次で見通しをもたせ、第二次で「やまなし」を通して読む力を付け、第三次で思考・判断しながら表現活動につないでいくという単元づくりの工夫がなされていた。
- ・高学年の指導事項(学習指導要領C読むこと(1)エ)を満たすための取組としては、「情景」と「心情」を捉えるのみでは断片的となってしまう恐れがある。第二次での「やまなし」の読みが、第三次の一枚文集の作成にも影響してくる。「やまなし」の学習で、どのような力を付けるために、どのような学習をして、どんな指導をするのか。それが結果として、一枚文集に表現されてくることになる。
- ・第三次での伝え合う活動を通して、子どもたちの気付きや変容が一枚文集に生かされなかったと振り返りがあったが、実践にある「作品の良さ」のワークシートに加えて、「伝え合いを通して学んだこと」を書くワークシート、「一枚文集に反映させたことを明らかにする」ワークシートがあると、子どもが自分の読みを深めていくことができ、教員も学びの見取りができる。

### 協議の柱に即した協議

協議の柱「付けたい力を踏まえた単元・授業づくりとその見取り」に沿って、グループ協議・ワールドカフェでキーワードにまとめて、全体発表で共有した。

Aグループ：教員も子どももゴールの姿を思い浮かべる

- ① 評価の規準をはっきりと定める。
- ② 単元の学習計画を子どもとつくる。
- ③ 指導事項が子どもの実態に即したものか。教材の価値は生かされているか。

Bグループ：全てにおいて可視化を！

- ① 指導事項の精選。

- ② 力を見取ることができるワークシートやノート指導。
- ③ 見通しと振り返りの位置付け。

Cグループ：主体的な児童の学びとそれを支える教員の役割

- ① 児童の実態を把握して、付けたい力を明確に！
- ② 児童の意欲を持続させるための具体的手立て。
- ③ 言語環境を整える。

Dグループ：生きてはたらく国語の力を付けるために

- ① 付けたい力の明確化。
- ② ゴールを示す。
- ③ 見通しと振り返り。

Eグループ：子どもの目線

- ① 交流の目的、タイミング、方法。
- ② 振り返り(子どもにとっての積み重ね、教員にとっての見取り)。
- ③ 付けたい力の精選。

Fグループ：ぶれない

- ① 見通し(ゴール)をもった学習計画。
- ② 交流・伝え合いの大切さ。
- ③ 教員がぶれない。

Gグループ：計画と振り返り・修正

- ① 年間計画(どの項目をどの単元で実施するか)。
- ② 学習計画(子どもと作り上げる)。
- ③ 評価計画(目標を明確にして、評価を明確・計画的に)。

## 全体のまとめ

### ○「付けたい力」の明確化

単元を通して育成する力は何なのか。それぞれの領域（「読むこと」「書くこと」）の指導事項を明確にすることが何より重要である。そして言語活動を通してどのような力を付けさせたいのか、より具体化することが大切である。

### ○「言語活動」を通して指導事項を指導する

国語科は言語活動を通して指導事項を身に付けさせるのだが、言語活動が充実したものであれば、指導事項以外のこと（学ぶ意欲、仲間の理解、協調性、考えの明確化など）も同時に育まれてくる。とはいえ、指導事項はおろそかにすることなく、意識していなければならない。

### ○「複合単元」について

指導事項が1単元1領域ではない、いわゆる「複合単元」もあり得る。しかし、その際には、複数の領域の指導を組み合わせることによって学習効果が高まるか否かを確認すること、指導者の意図的な指導となることがポイントである。大事なことは、付けたい力を明確にした上で、ねらいを絞り、それにふさわしい言語活動をデザインしていくことであろう。「児童・生徒」及び「教員」にとって「理解しやすい」授業づくりが求められる。